

東アジア国際政治経済と文化外交の融合

要旨

2008年3月国際協力学専攻修士修了 氏名：張崎 学籍番号 47-66868

キーワード：東アジア ソフトパワー 指導教員名：柳田辰雄 教授

本論文は文化環境が似ている東アジアの中国、日本、韓国を中心に東アジアのソフトパワーを論じる。

私の貢献は第一：ハーバード大のナイ教授の著作「ソフトパワー」は主にアメリカを中心に論じた、ナイ先生の本が凄い著作ですが、アメリカ以外所余り触っていません。それで、私は東アジアのソフトパワーを中心に論じる目的で修士論文を論じました。

第二：アメリカの衰退と欧州連合の台頭によって、世界が一極化から再び多極化になります。ナイ先生の本はアメリカのソフトパワーを例証するため繰り返してソ連の事を比較しましたが、今では世界情勢が大きく変わった。ソ連（Soviet Union）の破壊により、反ソ同盟（米、日、中、西欧）が分裂し、短期間に米が主導した一極世界になったが、アメリカの衰退と欧州連合の台頭によって、世界が一極化から再び多極化になります。ナイ先生の著作が典型的な一極世界の背景の中に生み出した著作である。私は新国際状況の背景を基でアジア分裂を避けるため、ソフトパワーの重要性について論じた。

欧州はアフリカを主導する事に対して、アメリカは米州を主導している。残るアジアは米欧競争の焦点になる。アメリカは日本に対する影響力を維持しように対して、欧州連合は中国と急に接近して、中国を通じてアジアに対する影響力を発揮したい。そのまま発展していくと、最終にアジア全体が二つ陣営になって、アジア分裂と紛争が激しくになる。分裂と衝突より、アジア全体に対して、一番良い選択は、欧州連合みたい、アジア連合体を作る事である。東南アジアはアセアンで統合の方向に進んでいるが、問題ある所は日本、韓国、中国である東アジアである。三国の間に集団ソフトパワーを応用して、不信と矛盾を解消し、アジア統合を促進するのは一番近い道である。

本論文の構造としては

第一章ソフトパワーの全体像及び定義を紹介する。ソフトパワーを発揮する基盤であるソフトパワーの三つの源泉：文化、外交、源泉及びソフトパワーの限界或いは最低要求である共通な文化背景を説明する事より、第二章と第三章の土台を作った。

第二章、ナイ先生が定義したソフトパワーに対して疑問を提出して、集団と

調和ソフトパワーを定義する事より、第六章の東アジア統合目標制定の基盤を作った。

第三章では東アジアの共通的文化背景を持っている事を証明するため、東アジアに古く存在した儒教思想を紹介した。さらに儒教によって古アジアで儒教によって生じたソフトパワーが存在した及びハードパワーを重視した王朝とソフトパワーを重視した王朝の最終運命を比較した。第三章の最終に儒教アジアの伝播歴史から東アジア共通な文化背景を持つ事の土台がある事を説明した。

第四章では現代韓国、日本と中国三国の国家ソフトパワー戦略の現状を紹介する。韓国のドラマを中心になっている韓流が日本と中国で大人気になった原因、日本のアニメ戦略の要点及びアニメ戦略が中国で応用現状、中国の孔子学院の国家背景及び米国と日本の展開状況を事例した。

第五章ソフト戦争は第六章アジアソフトパワー将来の基盤である。過激的な観点と思いますが、主に日米と中米の為替と貿易摩擦の紛争によって、米は非武力手法で自国利益を守った。私は米の経済紛争の解決方法をソフト戦争に定義した。米主導したソフト戦争より日本が10年以上の不況を生じた。第一回ソフト戦争の勝利を手に入れました後に、同じ方法で中国に対して第二回ソフト戦争を起こした。同様に中国は巨大な損失を受けた。

第六章は欧州連合とユーロ安定の成功によって、欧州連合は東アジアの模範に成ることを強調し、東アジアの統合と提携はソフト戦争の防犯及びアジア全体の統合に対する積極的な意味を論じた。その統合の障害を削除する由一な方法は共通文化背景を持つ東アジア三国は集団ソフトパワーの力を発揮する事である。

全体の構造：

